

残像に口紅を

筒井康隆



中公文庫



中公文庫

残像に口紅を

1995年 4月3日印刷

1995年 4月18日発行

著 者 筒井康隆

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34 TEL 03-3563-1431(販売部)

©1995 CHUOKORON-SHA, INC. / Yasutaka Tsutsui

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202287-8

Printed in Japan

中公文庫

残像に口紅を

筒井康隆



中央公論社

目次

第一部 世界から言葉が消えていく

7

第二部

世界からはすでに「あ」と「ば」と「せ」と「ぬ」と

「ふ」と「ゆ」と「ぶ」と「べ」と「ほ」と「め」と「ご」と

「ぎ」と「ち」と「む」と「び」と「ね」と「ひ」と「ぼ」と

「け」と「へ」と「ぽ」と「ろ」と「び」と「ぐ」と「ぺ」と

「え」と「ぜ」と「ぐ」が消えている

177

第三部

世界からはすでに「あ」と「ば」と「せ」と「ぬ」と

「ふ」と「ゆ」と「ぶ」と「べ」と「ほ」と「め」と「ご」と

「ぎ」と「ち」と「む」と「び」と「ね」と「ひ」と「ぼ」と

「け」と「へ」と「ぽ」と「ろ」と「び」と「ぐ」と「ぺ」と

「え」と「ぜ」と「ぐ」と「す」と「ぞ」と「ぶ」と「ず」と

「づ」と「み」と「ぎ」と「ど」と「や」と「じ」と「ぢ」と

「き」と「で」と「そ」と「ま」と「よ」と「も」と「げ」と

「ば」と「り」と「ら」と「る」が消えている

295

調査報告

筒井康隆『残像に口紅を』の音分布

泉 麻子
水谷静夫

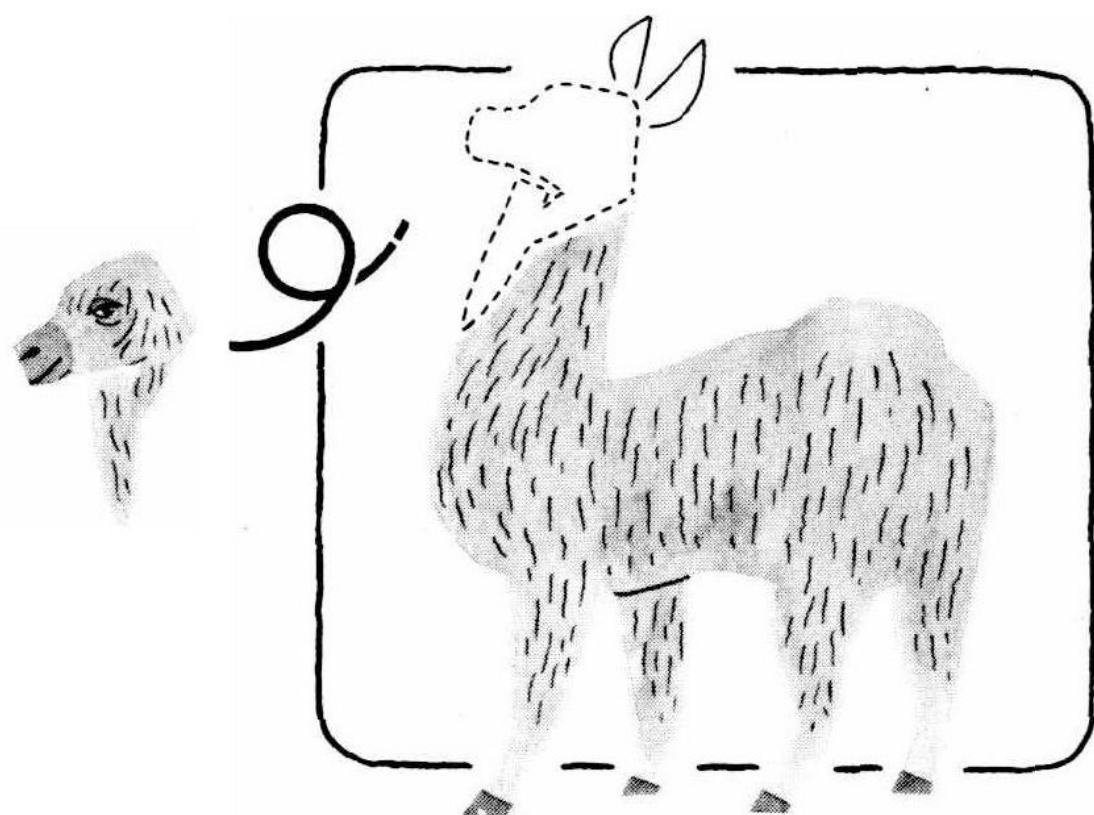
309

本文イラスト 山内ジョージ

残像に口紅を

第一部

世界から言葉が消えていく



□るぱか

―世界から「あ」を引けば

神戸市街の中心部から約十キロ東、阪急電車御影駅のすぐ山側に洒落た二階建てのレストラン・ビルが建っている。そのすぐ近く、深田池という神功皇后ゆかりの古い池の周辺は公園にもなっていて、池の北西側のほとりには七年前マンションができた。佐治勝夫が購入した三DKの住まいがそのマンションの三階なのだった。レストラン・ビルの一階奥の洋菓子店を兼ねた喫茶店に佐治はしばしば出かけ、窓ぎわの席でぼんやり時間を過ごす。執筆で疲れた神経を休める、というほどのことではなく、ぶっ続けに原稿を書き続けていると一種の空しさに襲われ、人生を浪費しているような

気にもなるし、そもそもなぜ「浪費」などということばが浮かぶかといえ、執筆は、それを職業にしようというほどの者にとっては快樂とも言えるため、その快樂に絶頂感が迫ってきた時、そいつをちよいとばかり先送りにして、それ故に湧き起る愉悅の中へしばし身を浸そうかという気にもなるのだ。

マンションを購入したのは自宅が書物で埋まりはじめたため、そのうちのせめて何分の一かでも移して書庫がわりにしようという意図が半分と、もう半分は、それぞれ個性的に美しい三人の娘が成長して全員が屋内空間に自己のテリトリーを確保しようと陣取り合戦をはじめ、家長たる勝夫の居心地が悪くなってきたためだ。仕事はほとんどマンションでするようになった。神戸市の西のはずれの自宅へは時おり必要な書物を取りに戻る。そんな日は妻の糸子、長女の弓子、次女の文子ふみこ、三女の絹子をつれ、五人家族で神戸市内の料亭だのレストランだのへ赴いたりもする。

家族関係は良好だ。全員仲がよく、うまくいっている。だからこそ自分がこのように虚構にうちこめるのではないかと佐治勝夫は思ったりもする。うちこみ過ぎたくらいだ。読者がついてこれられないようなところまで独走してしまった。今日、評論家で友人の津田得治が話したいと言ってきたのも、そうしたことと無関係ではなさそうだと佐治は想像する。つまりいつもの喫茶店で、今日の佐治は珍しく人を待っているのだ。津田得治と今日の午後、この喫茶店で話そうと約束したのだった。

津田得治という評論家は、作家佐治勝夫にとって分身とも言える存在ではないか、と、佐治は思ったりもする。それほど考えかたが似ているのだが、どちらかといえば津田の方が佐治より一步か二歩先へ進んでいるようだ。しかし、どうやらそれは佐治の小説を読むことによって刺激を受け、触発されて自分の文学理論を前進させているようにも思える。佐治は理論家ではないから、津田の文章がよく理解できない。とはいえ、ところどころで自分の作品へのとんでもなく飛躍した解釈を見つけては着想を得たり、励まされたりもする。だがそんな津田も、今日だけは佐治への共感を示しにくるのではなさそうだった。マンションへ電話してきた時の口調では、一ヵ月前上梓されたばかりの佐治勝夫の観念的な小説に対してやや不満げな口調だったのだ。無理もないな、と、佐治は思う。ちよつとばかり独断と独走が甚だしかつたようだ。しかし、かまわないではないか。小説とは、何をどのように書いてもよい文学ジャンルなのだから。たとえそれが評論のようなものでも、小説と銘打たれていれば小説だと主張できる。小説に対して、まるで随筆のようだ、とか、まるで自由詩のようだ、とかいう批判は的はずれだ。そもそも他のジャンルの形式の不自由さから逃れて自由になったのが小説なのだから、逆に随筆そのもの、自由詩そのものを、これは小説だと主張したっていいからかまわない筈なのだ。

津田得治は助教授として神戸の大学でフランス文学を教えている。講義は午後二時頃

に終ると言っていた。佐治は二時過ぎからすでに二十分近く待っている。店内の他の客はほとんど若い女性で、他には有閑マダム風のグループがひと組といったところだ。

津田得治はまるで葬式帰りのような黒っぽいスーツでやってきた。

「ごめんご免。待たせちゃって」軽やかな身ごなし。電車に乗ってきたらしいことが匂いでわかった。タクシーよりもその方が早いのだ。

「読んだよ。全部」コーヒーを注文するなり、津田はさっそく佐治の小説を話題にしはじめた。そういう仲なのだった。「とうとう、えらいとこまで行っちゃったね」

「書いているうちにだんだんと、ね」佐治は苦笑した。「自分ではどうにもならなくてね。しかし、書きながら方法論を次第に徹底させるってことも、小説でなら許されるんだろう」

「そりゃ、かまわないさ。それにぼくには、そうやっていくだろうという予測がついていたから」手を拭いながら津田は店内を見まわし、窓外を眺める。「ここ、落ちつくね」「マンションへ来てもらってもよかったんだけど、散らかしていてさ」

「いいのいいの」やはり黒っぽい鞆から、津田は佐治の新刊を取り出した。「読むのに時間がかかってさ」

「そうだろうな。でも、予測がついたというのは凄いな。君だけだろうねそんなこと言えるのは」

津田は佐治の著書をテーブルの隅に置いたまま、開こうともせず喋りはじめた。

「君が超虚構ということをしきりに言いはじめたのはもう十年ほど前になるかな。待てよ。最初がたしか、昭和五十年になってすぐの『国文学』誌上だったから、もう十三年になるわけだ。現実が、小説以上に虚構的になってきていることを君は『現実が虚構を模倣しはじめた』と表現したんだったね。だから『現実が模倣し得ないほどの虚構性を追求する』と宣言した。それによって逆に、現実への回帰を果たすんだとね。『超虚構宣言』。または、『メタフィクション宣言』。当時それほど騒がれなかったけど、その後しばしば『超虚構』とか『メタフィクション』とかいうことばを見かけたり耳にするようになったから、君が言い出したことばだってことを誰も知らないままにじわじわ浸透したんだろね。ぼくは当時君の意図がよくわからなくてさ。私小説嫌いと、ノンフィクションの進出に対する危機感がそんなことを言わせてるのかなんて、そんなふうに考えてたんだ。そうじゃなかったんだよね」

「いや。多少はそれも。君。コーヒーが冷めるよ」

「うん」

客の数が減り、日が翳った。津田はコーヒーを飲む。

「どちらかといえば、言語表現の問題だったのさ」と、佐治は言った。「だから、虚構性を強調した、いわゆる本当に小説らしい小説というのが超虚構だとすると、現実には

そういう小説がほとんどだからね。では小説と同じような言語や文章で綴られている私小説や随筆やノンフィクションは何かというと、『超虚構』の『超』を省いた、ただの『虚構』だったことになってくる。つまり、やっぱり虚構なんだ」

「君の、汎虚構論の始まりだよな。しかし、それはもう少し先のことじゃなかったかな。『小説を批評する小説』という意味で君がメタフィクションということばを使ったのが、ぼくの知る限りじゃ、君がエッセイの直後に長篇を書いて、さらにその長篇について君が自分で解説していたNHKの『テレビコラム』でのことだったわけさ。だから君は汎虚構論よりも先に、虚構内存在、つまり自分が小説の中の登場人物だということを意識している人物としての虚構内存在というものに思い至ったんじゃないかい」

「さてどっちが先だったかな。書いたり喋ったりしたのは前後してるけど、考えついたりのはほとんど同時だったかもしれないね」

「そこまで考えついたら、それが唯虚構論にまで発展するのはもう時間の問題だった」

津田はくすつと笑った。「随筆も虚構、ノンフィクションも虚構、それならフロイトの著書も、マルクスの理論も、その他すべての学術論文も、もちろん新聞記事も、当然のことながら広告文も、すべて、すべて虚構。なぜならそれらはすべて言語で表現されているからだ。そうだったね」

「最近もまたそのことを考えたよ。ソーシャルなども読んでみた。正確には文字表現と

いふべきだろうけど、やっぱり言語ほどでたらめな記号はないという結論に達してさ。何度考えてもそうとしか思えないんだ」

「ま、いいだろう。そこまではまだ汎虚構論だった。しかし今度のこの小説では」指さきで、津田は佐治の本の固い表紙を叩いた。「ついに現実そのものが虚構だということころまでできてしまったね。まん中辺で、主人公が作者に話しかけはじめた。おやおやと思っているうちに議論になって、ついに作者が主人公と話しながら散歩しはじめて、主人公の家までやってきた。後半、君は完全に虚構内存在になってしまった。主人公そっちのけで活躍し、最後は主人公や女主人公やその他の登場人物を自分の家につれてきた。奥さんや娘さんに彼らを紹介し、書斎でえんえんと議論をやり、結末は、というところ、この小説は終わったように見えてもまだ終わっていない、虚構としての現実につながっているのだからというわけだ」津田はわざとらしく溜息をついた。「つまり、君とぼくが今こゝろやって話しているのも、虚構というわけだろう」

「その本の続きをやってるわけだよ」佐治はにやにや笑った。「この小説に続く物語が始まっているわけさ」

「なるほど。たしかにこの現実が虚構だったとしても、ちっともおかしくはないね。宗教的観点からも、哲学的観点からも、そういうことは言えそうだ」津田は佐治の意志を確かめ終えた、とでもいった様子で椅子の背に凭れた。「ぼくの考えだと、君は幸福過